



Title	G.エーベリンクの神学
Author(s)	雨貝, 行麿
Citation	基督教学, 15, 27-29
Issue Date	1980-07-09
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46383">http://hdl.handle.net/2115/46383</a>
Type	article
File Information	15_27-29.pdf



[Instructions for use](#)

## G・エーベリンクの神学

### 兩 貝 行 磨

G・エーベリング (一九二二生、Berlin) については、すでに《キリスト教信仰の本質》飯峯明氏訳新教出版社一九六三年によって知られ、高森昭氏(現関西学院大学)によって《解釈学的神学》をめぐる解説と提題とがなされている。すなわち《エーベリングの神学》聖書雑誌一九六七年三月号。《エーベリングの解釈学》日本の神学一九六八年。《ゲルハルト・エーベリング》聖書雑誌一九七一年二月号。小田垣雅也氏によるエーベリング神学の方法上の批評がなされ一九七〇年、後に氏の《解釈学的神学》一九七五年に所収されている。

しかし、六〇年代後半以後今日に至るエーベリングの精緻な歴史的・教理史的論証をふまえた諸論考 (Wort und Glaube II 一九六九年)、今日において宗教改革に依拠する神学的視野・展望をゆたかに示す、ルター研究

とそれにつづく論文集Ⅲ一九七五年をめぐる展開状況は知られていない。また欧米にあっても、十分な批判と対論とがなされていない(例えば、P. Stuhlmacher: Vom Verstehen des Neuen Testament Eine Hermeneutik 一九七九年)。

つまり、エーベリングは Dogmatik des christlichen Glaubens I~III を公けにして一九七九年以後、今世紀における Dogmatik 構築の責務をはたしはじめた。ここには、K. Barth の《教会的》Dogmatik とは全く異なる方法としかも伝統的構造を知るべき、Tübingen, Zurich をはじめとする彼の若い後継者たちの深い尊敬と大きな期待を感ぜざるをえない。かつて A. v. Har-nack 《キリスト教の本質》、Adam 《カトリシズムの本質》と比較される《キリスト教信仰の本質》の著者が、いまや《キリスト教信仰》の《Dogmatik》を展開する時が到来した。

彼の神学的思索の視野とその展開をみると、その源泉がルター研究に示される宗教改革以来福音主義神学 sola fide にあることは顕著である。Evangelische Evangelienauslegung 一九四二年に「ルター神学の特質を」組織神学の方法によってではなく、教現史的発展のなか

でありらかにした成果を要約して Luther Einführung in seine Denken にあらわしたが、今日的な人間学的・哲学的問題との接渉のなかで追求しようとする態度は論文集Ⅱ巻 Beiträge zur Fundamentalthologie und zur Lehre von Gott Ⅲ巻 Beiträge zur Fundamentalthologie, Soteriologie und Ekklesiologie にも著しい。ここに、彼自身の神学的思索の視座ルター教会の自覚、その神学と教会に対する責任を学ぶことができる。それが、信仰の根拠を与えているがゆえに、神学的思索が良心的深みを示している。

ここからして教会の宣教に対する明確な責務の態度が第二の彼の特徴である。すなわち、全学共通の聴講者のために《キリスト教信仰の本質》につづいて、チャーリヒ市民 Gemeinde のために主の祈りともつづいて、説教 Vom Gebot 一九六五年、Psalmenmeditationen 一九六八年、Die zehn Gebote 一九七三年において示す宣教実践に対する積極的態度である。また、Das Kriterium der Theologie ist die Predigt を語らうとつづいて神学的思索の内容と意義を示す。

つづいて R. Bultmann 以来、神学的思惟は実存的な《信仰と理解》をめぐる努力されたが、ヘーブリンクにあ

っては、歴史的に、《語りかけに対する責任的応答》であり、それが《良心》の問題であることを示した。これは道徳の問題であるよりも、人間の人間たる根拠を示すものである。すでにルターの信仰がこれであった。良心概念を省察することによって、救済が言葉 Wort によってのみ伝達 mitteilen されるものであり、言葉の出来事こそ、救済の出来事であることを示した。言葉を事件とする教会の宣教は、個人的な納得をめざすものではなく、教会史、教理史が伝承する歴史的に形成された教会的 gemeindlich 決断なのである。これが信仰なのである。

この点から、解釈学的思惟を基軸にして、後進に道標を示すのが Studium der Theologie Eine enzyklopädische Orientierung (Uni-Taschenbücher 446) 一九七七年である。

そして彼は Dogmatik der christlichen Glaubens の Gesamtplan を示す。

#### Prälogomena

- I. Der Glaube an Gott den Schöpfer der Welt
- 1. Glaube 2. Gott 3. Welt 4. Mensch

- II. Der Glaube an Gott den Vorseher der Welt (Einführung in die Christologie)

5. Gott in Christus 6. Der Mensch Jesus
  7. Die von Gott geliebte Welt 8. Der Glaube an Jesus Christus
  - III. Der Glaube an Gott den Vollender der Welt (Einführung in die Pneumatologie und Eschatologie)
  9. Der Mensch in Christus 10. Der rechtfertigende Glaube 11. Die Überwindung und Vollendung der Welt 12. Gott alles in allem
- 神によって生起する信仰の出来事が、救済史的展望のなかで構築されていくことを気づく。